

特 集 心気症をめぐる

第 5 回 日本精神病理・精神療学会 シンポジウムより

(1968 年 10 月 11, 12 日, 大阪厚生年金会館ホールにて)

まえがき

村上 仁

まず最初にこのシンポジウムの司会者として一言お断りしておかなければならない。私はこのシンポジウムの主題として、狭義の神経症の一類型としての心気症だけでなく、種々の精神病的心的状態、離人症、自己臭症状群、分裂病の身体感覚異常などをも問題とし、これらの問題をテーマとした応募演題によつてシンポジウムを構成したいと予告した。しかしこれは後になつて考えて見ると、あまりにも広汎な領域を包含するものであり一つのシンポジウムとしては明らかに無理があつた。果たして、本年度は一般の演題も数が多かつたが、ことにこのシンポジウムに関連する演題が数多く寄せられ、時間の都合上残念ながらその演題の多くを割愛せざるをえなかつたし、その一部は本日の午前中の一般演題の部にも食い込むことになつた。これはもつぱら不用意な予告をした司会者の私の責任であり、応募していただいた皆様に深くお詫び申上げたい。

さて本シンポジウムは二部に分たて、第一部は保崎氏の心気症の概念についての序説に始まり、

西園氏、佐々木氏、中久喜氏らによつて神経症の一型としての心気症の類型的分類、発病機制、および精神療法的手法などが論ぜられ、活発な討論と相まつて、一応まとまつたものになつたと思われる。ただ小谷野氏の体臭恐怖および視線恐怖に関するテーマは、本来の心気症とはやや趣きを異にし、十分の討論もなされなかつたので来年度以降にさらに詳しい検討がなされるはずである。

第二部は小見山氏の身体の現象学としての観点からの心気状態論につづき、小池氏、竹内氏、吉松氏らが分裂病の体感幻覚について論じたが、問題が複雑なせいもあり、シンポジウムとして成功したとはいへない点があつたことは残念である。

なお本日午前中には、心気症関係の演題として、山下氏（北大精神科）の「対人恐怖と疾病恐怖との親子関係について」、中川氏ら（九大心療内科）の「心気症における医原性因子の役割」、堀氏ら（久留米大精神科）の「分裂病における身体像の変容」などをはじめ、このシンポジウムに関連する二、三の演題があり、何れも興味深いものであつたことを附記する。

○ シンポジウム「心気症をめぐる」演者一欄（発言順）

司 会 村 上 仁 京都大・精神科
小 木 貞 孝 東京医科歯科大・法医学研

保 崎 秀 夫 慶応大・精神科
西 園 昌 久 九州大・精神科
中久喜 雅 文 東京大・精神科
小 池 淳 小曽根病院
吉 松 和 哉 東京大・精神科

小谷野 柳 子 東京医歯大・精神科
佐々木 時 雄 関東労災病院
小見山 実 東京医歯大・精神科
竹 内 直 治 信州大・精神科